

高田
宏

山甲へ

日本交通公社

高田宏

岬へ

日本交通公社

岬へ

一九九四年六月一五日 印刷

一九九四年七月一日 発行

著者 高田 宏

発行人 岩田光正

発行所 JTB 日本交通公社出版事業局

〒150 東京都渋谷区道玄坂一―一〇―八

渋谷野村ビル七階

編集部 〒〇三―三四七七―九五七四

図書のご注文はJTB出版販売センターへ

〒150 東京都渋谷区道玄坂一―一〇―八

渋谷野村ビル七階

〒〇三―三四七七―九五八八

印刷所 凸版印刷株式会社

©Hiroshi Takada 1994 禁無断転載・複製 944601

Printed in Japan 801450 ISBN4-533-02035-6

落丁・乱丁はお取り替えます。

ブックデザイン／エディトリアルデザイン研究所

本文写真／高田 宏

地図／国土地図



目次

犬吠崎 ————— 5

大海の出口 森と岬の異界性 人面商売やめた太郎

経ヶ岬 ————— 25

海のなかの純白の竜宮 外庄による灯台誕生 聖地としての岬

竜飛崎 ————— 41

風の村・風の岬 「津軽」ゆかりの宿にて 青函トンネル基地の慰霊碑

都井岬 ————— 59

一心不乱のやさしさ 名前をもつ馬たち 幸島のサルのイモ洗い

安乗崎・大王崎 ————— 77

海の民の小さな国 嫁の天国・国府 九鬼水軍の住んだ港

弾崎 ————— 95

津波のあとの網起こし マグロの心臓の刺身 落日の岬

積丹岬・神威岬

111

女人禁制の海の難所 太古の姿を残す海辺 ソーラン節を生んだ海

知床岬

129

人間を拒む大地の涯 「ひかりさけ」の舞台 知床で買った夢

足摺岬

145

海の道、黒潮 ショーン万次郎のふるさと 巡れたちの岬

野母崎

163

ほんとうの鯛の刺身 岩磯の潮だまり 遠見番所のおかれた岬

石廊崎・爪木崎

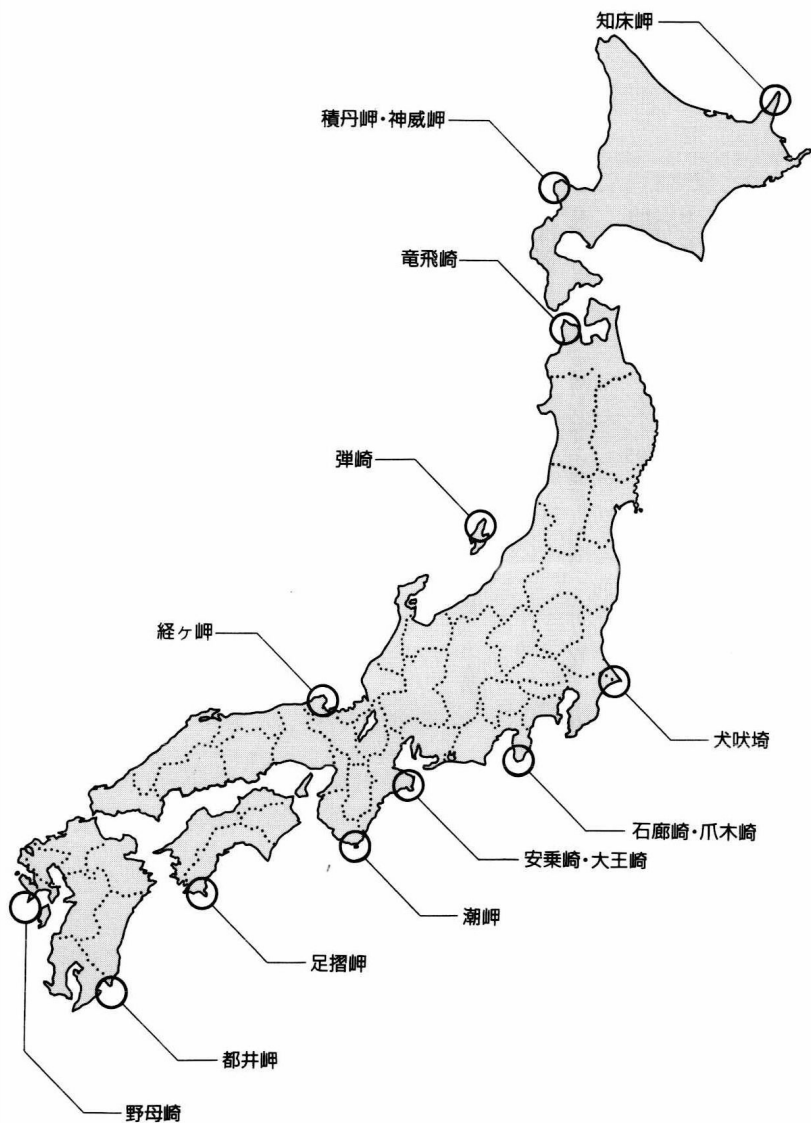
179

花ざかりの海辺 「医者いらす」の薬草 ジャングルパークの異界体験 伝説の岬・石廊崎

潮岬

195

センチメンタル・ジャーニー 海の魚は、かはいさう 忘れえぬ人々



犬吠埼

千葉県

大海の出日

森と岬の異界性

人間商売やめた太郎



明朝の日の出は六時一三分。部屋に置いてあった「ぎょうけいかん暁雞館かわら版」にそう書いてあったので、五時半に起きることにした。

建物は新しくなっているが明治中期からの古い宿で、国木田独歩、島崎藤村、高村光太郎、竹久夢二など数多くの作家や詩人や画家たちが泊まりに来ている。彼らはおそらく例外なく犬吠の海の夜明けを見たことだろう。そのため宿の者に日の出の時刻をたずねたのではないだろうか。かわら版は一枚の紙の表裏に、種々の案内や列車・バス時刻表、その日のテレビ番組などが載せてあり便利なものなのだが、日の出・日の入りの時刻と満潮・干潮の時刻が記されているのは、この宿のそうした歴史の反映であろうかと思った。ともあれ行きとどいたサービスだ。

犬吠埼の日の出を見たいと思ったのは、徳富蘆花の『自然と人生』の一篇「大海の日出」を読んだからのことだ。文庫本で二ページに満たない短文ではあるが、夜明け前のほのぐらい海に波が白く碎ける頃から、空と海に色彩があらわれて刻々変化し、ついに水平線から太陽が昇るところまでを、微細に描き出している文章だ。華麗で緊迫した文語体が、移りゆく壮大な海景をとらえている。

明治二十九年十一月四日の夜明け、蘆花は水明楼（暁雞館のとなりにあつたが今はない）で、

この海を見ていた。その描写から見て、たぶん手さぐりでメモをとりながら明けてゆく海に目を凝らしていたのだろう。

『自然と人生』は四年後の明治三十三年に出版されて当時のベストセラーになった。たんに本がたぐさん売れたというだけではなく、それは明治の青年たちの自然観を変革する事件であった。なかでも、『雑木林』『大海の出自』の二編は、旧来の花鳥風月の美意識を根こそぎくつがえして自然を見る新しい目を見ひらかせるものだった。

「大海の出自」は明治の青年たちに衝撃を与え、犬吠埼の日の出へと人びとを誘った。藤村や光太郎も犬吠埼に泊まりに来る前に読んでいるにちがいない。夢二が紀行文に、「金泥の波、煌々と岸辺に去り、岩に砕けては、黄色の雪を飛ばしてゐる」と書いているのは明らかに、蘆花の書いている、「眼下の磯に忽焉^{こつえん}として二丈ばかり黄金^{こがね}の雪を飛ばしぬ」の借用だ。

紀行文作家大町桂月が明治四十二年刊の『関東の山水』のなかで「海辺の月」を書いている。蘆花の見たのと同じ海の月の出を、これも文語体でみごとに描写したものだ、これを書くとき桂月はつよく蘆花を意識していたはずだ。蘆花が「大海の出自」を書いているかぎりはその二番煎じは嫌だ、おれは同じ海でも月の出を書いてやる、という気持ちではなかっただろうか。「大海の出自」と「海辺の月」から、それぞれごく一部分を引いてみよう。

……曙光は花の発^{ひら}くが如く圈波の広まる如く空に水に広がり行きて、水いよく白く、東の空

ますく黄ばみ、弦月も灯台もわれと薄れ行きて、果てはありとも見へずなりぬ。此時日の使とも覺しき渡り鳥の列鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば……（「大海の出日」）

……海は碧に、空は青し。水天蒼茫の際、月ひとり上りて、やうやく小となり、一条の金蛇、今や波上を走る。愈のぼりて、金蛇大となり、波光とほく月にかがやきて、万里金粉をちらし、沖に釣する漁舟四つ五つさやかに見ゆ。（中略）月天に冲するに及びて、金波今は際なく、白帆また隠る、所なし。白色の灯台も、全く夜色の中に没し……（「海辺の月」）

なお、「海辺の月」には、その当時の犬吠埼あたりの様子が、こんなふうに記載されている。「ここに海水浴の旅館ふたつあり。暁雞館と言ひ、水明楼と言ふ。犬吠埼を左にし、長崎がはなを右にせる一曲の海浜の、長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後は小松の生へつぎきたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に沈み、自ら別天地をなせり。」

蘆花や桂月の泊まった水明楼の跡地には、蘆花の兄蘇峰の筆で「水明楼之址」と刻された石碑が建っている。昭和三十二年、蘆花の三十回忌の日に、「大海の出日」を生んだ宿を記念して建てたものだ。

さて、そろそろぼくの「大海の出日」を書かなければならない。大自然の壮大を写すには、文語体のほうがはるかに有利だな、と思うのだが、いまさら文語体でもない。日頃は現代日本文に

不便を感じないどころか、明治や大正の文章よりも今の文章のほうがよほど洗練されていると思
っているのだが、日の出の海のような大自然を書こうとすると、くやしいけれども文語体にはか
なわない。しかし、いまばくが、まねごとの文語体を使ってみても、滑稽になるだけだ。夜明け
の海を見、ノートにメモをとりながら、それを痛感し、蘆花や桂月の時代をすこし羨んでいた。
起き出したのは、予定よりすこし早い五時すぎだった。潮が満ちてきていて、波の音に目を覚
まされたようだ。

鉛色の海に波頭が白く砕けていた。日の出までまだ一時間ばかりあるのだが、空はもうかなり
明るく、上空は申し分のない青空だ。

水平線上に横長に雲が並んでいる。雲のすこし上には三つ四つ星が残っている。

メモをとるために部屋の電灯を点けたら、海も空も見えなくなった。大きなガラス戸いっぱい
に部屋の内部が映ってしまう。電灯を消すと、すぐ庭先まで来ている海がうごいている。メモは
手さぐりで書くことにした。

——雲がじゃましてるなあ。水平線に出てくる太陽を見るのは無理かな。上のほうはよく晴れ
ているのに。

まあしかし、空模様ばかりは注文通りにはならない。運次第だ。と思っていいたら、左手のほう
の雲がこまかく分かれだして上方へ動きはじめた。雲と水平線とのあいだに隙間ができた。その
隙間が赤々と輝き、雲の下部を染めてゆく。薄青の上空の下で薄紅濃紅に染まる雲と、水平線上

の輝く赤と、わずかに金色に光る水平線近くの海の色とが、全体で着物の裾模様のように見える。太陽はぐんぐん水平線に向かって昇っているらしい。雲と水平線との隙間がまばゆい赤に色上がりしてゆく。

五時四〇分、庭先の岩にも波が大きく砕けはじめた。左手の犬吠埼灯台の放つ光はすでに弱くなっている。沖合遠くを二隻の船が通って行く。シルエットになって黒々とした船体だが、それぞれ前部マストと船橋に明かりがついている。

浴衣に半てんを引っかけて庭に出た。足もとで海が鳴っている。まだ海鳥はどこにも飛んでいない。海が鉛色から鋼鉄色に変わって光りはじめた。

五時五五分、ウミウかと思える黒い鳥影が波の上を三羽、五羽飛ぶ。水平線上の雲が白さを増した。太陽はどこから出るのだろうか。雲と水平線とのあいだに隙間のできているところから出そうな気がするが、右手のびっしり雲のあるほうからだといの出を見そこなう。

六時五分、岩に打ち寄せる波が大きく白く舞った。満潮だ。鳥が群れ飛ぶ。頭上をカモメが飛んだ。灯台はまだまわっているが、放射光はほとんど見えない。

雲と水平線との隙間に、ぽつと赤い火が点もった。六時一三分だ。一瞬、あれ、何だろうといふかり、ああ日の出だと気づいた。赤い火がみるみる大きくなり、上部が雲に入ってゆく。雲の先端が金色にふちどられてゆく。

雲の上に出た太陽が海面に光の帯を走らせるころ、きらめく海に漁船がつぎつぎ出て行った。

手足がこごえ、からだの芯が冷えてきた。六時三〇分、大風呂のなかから見ると、犬吠埼灯台は光を消して昼の眠りに入っていた。

2

小学生の頃、尼御前岬と呼ばれる小さな岬の断崖から海へ飛び込むのが面白かった。岬の先端の崖を伝って途中まで降り、海面から数メートルの足場のいいところを見つけて、右手で鼻をつまみ左手で股のあいだを押さえ、立ち飛びで海に入った。いつも海の底にさわってみたいと思っていたが、そこはずいぶん深いらしくて、とても底には届かなかった。浮き上がるときに目を開ける。小型の魚が群れている。少年のぼくにとつて、それは最も美しい景色の一つだった。冬は降りつづく雪景色に見とれたものだが、夏は海中で見る魚の群れにためいきをつき、もう一度もう一度と飛び込んだ。北陸の海辺でのことだ。町から一時間ほど歩くと日本海があった。中学から高校になると、その海で落日を見たり、海に降り込む雪を見たりしていた。

紀州の潮岬の先端で野宿していたら自殺志願者と思われる保護されたことがある。そのときのことはいずれこの連載の潮岬編で詳しく書くつもりだ。大学生のときのことだった。

伊豆半島の東南岸で、磯を伝っているうちに断崖の中腹をたどる破目になり、もう一つ岬をまわったら浜に出るかと思ひながら、次の岬、また次の岬とまわって、指から血を流し、心細さに

泣きそうになったことがある。あれはサラリーマンになって二年目か三年目のことだった。

岬があると、何の用もなく、とりたてて見るものがなくても、その先端へ行ってみたくなくなるのは、ほくだけのことでないだろう。

なぜだろう。よく分からない。岬の先端に立つて、見えるのはたいい海だけだ。北海道の納沙布岬に立てば、齒舞諸島や国後島が見えるけれども、それらの島を見たくてあの岬へ行つたわけではなかった。三浦半島の観音崎からは向こうに房総半島が見え、浦賀水道を行き交うたくさんの船が見えるが、それは観音崎に立つ目的とは言えない気がする。

海は、しかし、その日の天候で、いろんな姿を見せてくれる。のどかな海も荒れた海もある。海鳥たちの乱舞する海も、吹雪の走る海もある。それぞれの海が、ほくを惹きつける。だが、そのために岬へ行くのだろうか、と考えてみると、どうもそれだけではない。

なんだろう、岬へ足が向くときのあの気持ちの底にあるものは？

岬に立っているときの、あの孤独感というか、世界から切り離されてひとりぼっちになっているような感じ——たとえて言うくと、核戦争後の世界に孤児となつて残っているような、そんな孤独感、あるいは孤絶感なのだが、それが何故かほくを岬へ向かわせるような気もする。

岬は異界なのかも知れない。そして人は、ふだんの日々は人間界に生きているのだが、ときに異界へ身を投じたくなるのもあろうか。

岬では、だからあまり長い時間を過ごしてはいけないのではないだろうか。うっかりすると人

間界に帰って来られなくなる恐れがありそうだ。

犬吠埼の渡海神社に、天然記念物の極相林がある。ここからはもう海は見えないのだが、その二千坪あまりの鎮守の森に入ってみると、海の底にでも沈んでいるような気がしてくるところだった。連れて行ってもらったタクシートの運転手さんに、「なんだか気味がわるいですねえ。はやく帰りましょう」と催促されたものだった。

極相林というのは、はじめは松林などから長い年月のあいだに次第に遷移（植物相が交替してゆくこと）していった、もうそれ以上は変化しない極相（クライマックス）に達している森林のことだ。渡海神社の森の場合は、典型的な暖帯性常緑広葉樹林となつて安定している。タブを主樹として、シイ、ツバキ、トベラ、ヤブニツケイ、カクレミノなど数十種の樹木が混在している。こういう森では、枯れた木のあとには、その下に育っている後継樹が伸びてゆくので植林の必要がなく、大量の落葉が森の表土を肥やして木々の成長を助け、台風が来ても種々の性質の木が混在しているために被害が少ない。ひとことで言つて、実に健全な森なのだ。

だが、ここもまた、運転手さんを畏怖させたように、もう一つの異界なのだ。ぼくたち人間は、生まの自然に慣れていないところがある。公園の木々のあいだでは孤独感はないが、極相林のなかでは心のひるむところがある。

渡海神社の境内に、ヘルマン・ヘッセの言葉を記した立札があった。そのなかに、こんな言葉があった。

木は神聖なものだ。彼らと語り、彼らに耳を傾けることのできる者は真理を学ぶ。彼らは教義やおきてを説かない。彼らは個々の問題を取りあげず、生の根本法則を説く。（尾崎喜八訳）

人間界は教義やおきてにとらわれる世界であり、個々の問題にばかりかかずらう世界なのだ。「生の根本法則」に目を向けることはこわいから、なるべく目をつむっている。だが、木の世界は、裸の思想、根元の思想を強いてくる。そういう意味での異界なのだ。

岬も森も、どうやら、世俗に生きる者にとつては、根元的なものに直面させられる異界なのだろう。ぼくたちは、その場所を畏怖している。と同時に、いつでもどこかで気にかかっている。そういう場なのだ、と思う。

3

犬吠埼は数多くの文学者をひきつけている。その一人が「大海の出日」をのこした徳富蘆花だが、『銚子と文学者とのふれ合い』（銚子市教育委員会刊）に出ている名前から犬吠埼関係のいくつかを目次順に拾うと、こんなふうである。

島崎藤村、与謝野晶子、国木田独步、竹久夢二、若山牧水、佐藤春夫、高浜虚子、久米正雄、